

社会実装の見通し確認

SIP第3期課題シンポ

内閣府と土木研究所は7月31日、東京都千代田区の秋葉原コンベンションホールでスマートインフラマネジメントシステムの構築に関するシンポジウムを開いた。オンラインを含め約1500人が参加。戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)第3期

課題として取り組んでいる同システムの技術開発の進捗(しんちょく)や社会実装への見通しを確認するとともに、新技術に対応したインフラの在り方について理解を深めた。

開会のあいさつでは、南部智一内閣府政策参与・プログラム統括がビデオメッセージで「インフラを持続可能な形で維持、管理するのは、今の世代が次世代に対して果たす



べき大きな責任だ。国や地方自治体などの管理の現場では、人手不足、予算の制約、点検技術の継承といった課題も深刻化している。技術革新だけではなく、現場の実情に寄り添った解決策が求められている」と述べた。

SIPスマートインフラのプログラムディレクターを務める久田真東北大学院工学研究科インフラ・マネジメント研究センター長は、SIPで目指しているスマートインフラマネジメントシステムを説明し、「デジタルデータにより、設計から施工点検、補修まで一体的に管理し、持続可能で魅力ある国土、都市地域づくりを推進するシステムの構築を目指している」と語った。

基調講演では、慶応大理工学研究科特任教授で日本科学未来館館長の浅川智恵子氏が、視覚障害者である自身の経験も生かしながら研究開発に取り組んでいるAI(人工知能)スーツケースについて解説した。写真。スーツケー

スのように持ち運びができる視覚障害者向けのナビゲーションロボットで、AIと対話して目的地を設定し、自律走行でその場所まで安全に案内する機能を備える。日本IBMやオムロン、清水建設、アルプスアルパインで構成する次世代移動支援技術開発コンソーシアムとともに社会実装を目指している。

浅川氏は「未来の街では、このスーツケースのほかにパーソナルモビリティやデリバリーロボットなどさまざまなロボットが街中を移動するようになる。そういった時代が来た時にインフラは新たなニーズに応える必要がある」と指摘。「技術を開発するだけでなく、開発した技術を受け入れて支えることができる社会の実現も同じように重要だ」と呼び掛けた。

その後、SIPで進めている技術開発に関するパネルディスカッションを実施。国による社会実装に向けた制度設計と、地方自治体が主体となつて進めている技術開発をテーマに二つの会場に分けて行った。ポスターセッションでは、60程度の社会実装した技術の事例を紹介した。

